

## 幼児玩具における教育観について

中地 万里子<sup>\*</sup>, 阿部 明子<sup>\*</sup>, 川合 貞子<sup>\*\*</sup>, 高橋 裕子<sup>\*\*\*</sup>, 加藤 優子<sup>\*</sup>  
(平成4年10月1日受理)

### The Educational Perspective on Providing Toys for Infants

Mariko NAKACHI\*, Akashi ABE\*, Teiko KAWAI\*\*, Yūko TAKAHASHI\*\*\* and Yūko KATO\*  
(Received October 1, 1992)

#### はじめに

子どもの文化には、子どもが生活する社会の文化が反映する。今日、物質的な豊かさや科学技術の高度な進展、それらに伴う都市化や情報化の状況は、子どもの生活に密接にかかわっている。子どもの文化は本来子どもの主体性によって成立する文化であるが、幼い子どもにとって彼等が享受し活動する児童文化財や、遊びや種々の表現活動には、大人の媒介や援助を必要とする場合が多い。そして、そこには子どもを育てる立場の教育観や児童観が、顕在的あるいは潜在的に作用するのが当然と考えられる。

本研究はそのような観点から、今日に伝わる児童文化財の伝承的要素の現状と変容の条件を分析検討することを通して、また、現代的な創作児童文化財の内容分析を手がかりとして、社会の文化が子どもの文化に直接間接にどのような影響をもたらすのかを明らかにし、子どもをとりまく親や社会の児童観、教育観の実態に接近することを目的とするものである。

研究資料の収集方法は、質問紙法を中心に採用したが、その前段階として、日本の伝承的な育児観、教育観の具体的な現象を知る必要を感じた。そこで、今日の日本の生活文化の母体ともいえる伝承文化に注目し、年中行事等において父祖の生活を代々継承し続けている文化の故郷を訪ねるフィールド・ワークを実施した。地域的、季節的な偏りを避けられない条件の下での計画であり、予備調査や重点項目の選択などが十分に準備されない段階

\* 児童・保育科児童文化研究室

\*\* 児童・保育科児童心理学研究室

\*\*\* 児童・保育科教育・保育実習研究室

での調査ではあったが、地域性、民俗性を残す伝統的行事や育児習俗、素朴な民間信仰や生活用品としての民具、また、郷土色豊かな土や木や紙製の玩具等に触れることで、昔からの人々の暮らしの息づかいが伝わる感じであった。我々は、それぞれの時代や地域に生まれ育った子ども達の姿に想いを回らし、育てた土壌ともいべき親や祖父母や子どもにかかわる人々の子ども達への対応のしかた、子どもに何を期待し、どのように愛しんできたか等についての流れを読みとるように努力した。1989年と90年の2年間に、共同研究者が分担し足を運んだ地域は、秋田・青森を中心とした東北地方、大阪を中心とした近畿地方、倉敷・姫路中心の山陽地方・松江・出雲を中心の山陰地方であるが、計5回のフィールド・ワークは各地の歴史・民俗関係の博物館や郷土資料館を訪ねることによって、大きな収穫を得ることができた。即ち、その地域を中心とした特色ある年中行事や子どもの成長過程での通過儀礼、育児習俗、昔話や伝説、郷土玩具とそれにまつわる物語りなどの貴重な資料に触れることができたのである。

また、部分的ではあるが、それらの知見に関しての聞きとり調査ができたことは有意義であった。

このフィールド・ワークから日本の育児の歴史的、地理的、社会的背景を実感として把握できたこと、そして、古くから伝わる郷土玩具等についての新たな視野が開けたことは、現代の子ども文化に影響を与えている今日の親や社会の文化に対する考え方や、子どもの未来に期待する児童観や教育観の特質を知る上で、重要な視点と確かな手がかりを見出すことができた。

本報告では、乳幼児の玩具に焦点を絞って保育施設における玩具の現状と保育者の意識から、保育観の一端を

考察してみる。

### 1. 目的および方法

保育施設における伝承玩具の保有状況と子どもの接触状況の実態および保育者の手作り玩具の特質と子どもの活用状況の実態から、保育現場における子どものおもちゃ遊びの特徴と、保育者の玩具観について知ることを目的とした。

〈方法と手続き〉 質問紙法による通信調査で回答を求め、集計ないしは内容分析による分類によって資料の整理を行った。

調査時期：1990年10月～11月。

調査対象と回収率：各都道府県の、幼稚園、保育所各5施設を全国名簿より無作為に抽出した。各園には調査用紙を2部配布し、年齢の異なる2クラスの担当保育者に回答を依頼した。調査対象と回収率は表1A、Bの通りである。（調査対象クラス数は、回答保育者数である）

表1A 調査対象施設と回収率

施設別	発送園数	回収園数	回収率(%)
保育所	232	129	55.60
幼稚園	235	95	40.42
合計	467	224	47.60

表1B 調査対象クラス（保育者）数

施設別	回収部数					
	クラス別計	3歳未満児クラス	3歳児クラス	4歳児クラス	5歳児クラス	たてわりクラス
保	231	91	26	33	55	26
幼	170	—	17	71	78	4
計	401	91	43	104	133	30

なお、回答を寄せた保育者の保育経験年数は、保育所の3歳未満児担当の保育者でみると、10年以上20年未満が最も多く約66%、20年以上30年未満が約15%、30年以上も3人約3.3%で、中堅以上の保育者によるものであることがわかる。一方幼稚園の最年少3歳児クラスは10年以上20年未満が約41%、10年未満も同数であるが、そのすべてが5年以下の若い保育者である。5歳児担当を両施設で比較すると、保育所の場合10年以上20年未満がや

はり圧倒的多数で約73%、20年以上を加えると約85%となっている。幼稚園の5歳児担当は、10年以上20年未満が50%、20年以上を加えて58%弱で、平均経験年数は保育所に比較するとかなり低くなっている。

その他、アンケートの項目から調査対象について知り得ることは、両施設の公私立の別、所在地、園児数の規模、クラス別人数等であるが、これらは、内容の分析考察に必要な場合にとりあげることにして、ここでは紙面の都合上省略する。

### 2. 結果および考察

#### (1) 伝承玩具について

本研究では伝承玩具を昭和20年代以前から存在し、今日に受け継がれている玩具という一応の規定をした。アンケートではポピュラーな31種をとりあげたが（表2）、それらは玩具としての機能においては昔のものを継承してはいるが、色や形のデザイン、製法、材質等にはさまざまな現代的变化がみられるものが多い。

表2 伝承玩具

玩具	玩具
1. お手玉	19. 万華鏡
2. おはじき	20. 竹馬
3. あやとり	21. 竹とんぼ
4. ビー玉	22. めんこ
5. やじろべい	23. コマ
6. だるまおとし	24. ヨーヨー
7. おきあがりこぼし	25. まり <small>（球技に使うものそのぞく）</small>
8. 水でっぼう	26. はごいた
9. 紙ふうせん	27. たこ（凧）
10. 福笑い	28. かざぐるま
11. すごろく	29. 笛（鳩笛等）
12. カルタ	30. 車（きじ車、鳩車等）
13. ままごと道具	31. 獅子頭
14. でんでんたいこ	32.
15. 和だいこ	33.
16. おめん <small>（祭りで売っているようなもの）</small>	34.
17. けん玉	35.
18. つみ木	

保育室にあるものにチェック31種以外は玩具名記入

幼児玩具における教育観について

表3 保育施設にある伝承玩具（上位のもの、保育率20.0%を割るものは省略）

全施設			幼稚園			保育所3歳以上			保育所3歳未満			（保育所0,1歳）		
順位	種別	%	順位	種別	%	順位	種別	%	順位	種別	%	順位	種別	%
1	カルタ	59.1	1	カルタ	61.8	1	カルタ	59.3	1	ままごと	61.5	1	ままごと	41.7
1	ままごと	59.1	2	ままごと	59.4	2	ままごと	57.1	2	カルタ	53.8	1	まり	33.7
3	つみ木	54.1	3	つみ木	57.6	3	つみ木	50.0	2	つみ木	53.8	3	お手玉	25.0
4	お手玉	39.9	4	コマ	42.4	4	お手玉	45.7	4	まり	40.7	3	つみ木	25.0
5	コマ	39.0	5	お手玉	40.6	5	コマ	42.1	5	お手玉	36.3			
6	まり	32.7	6	すごろく	39.4	6	あやとり	36.4	6	水でっぽう	34.1			
7	あやとり	30.4	7	あやとり	35.3	7	水でっぽう	32.1	7	コマ	27.5			
8	水でっぽう	30.2	8	福笑い	34.1	8	すごろく	29.3						
9	すごろく	28.4	9	まり	32.9	9	福笑い	27.9						
10	福笑い	27.2	10	はごいた	27.6	10	まり	27.1						

① 伝承玩具の保有状況

保育施設に常備される玩具は、乳幼児の遊びを動機づけ、その活動を発展させる道具として用意されるものである。それは保育の教材でもあり、保育室や園庭にどのような遊具玩具を用意するかは、保育施設や保育者の保育観を反映するものともいえよう。ここでは、保育室におかれている伝承玩具について、まずその保有状況の実態を把握しようとした。表2の31種に記述欄を加えて回答された結果の上位10種は表3の通りである。

この結果、「カルタ」「ままごと」「つみ木」「コマ」「まり」など伝承玩具といっても古今東西に共通する乳幼児の基本玩具ともいうべきものが大部分を占めている。また調査時期も関係していると考えられるが、「カルタ」「コマ」「すごろく」「福笑い」「はごいた」のような伝承玩具の中でも日本の特色のはっきりした玩具が保育施設に取り入れられていることは、保育者の意図との関連が考えられる。

保育施設別の伝承玩具の保有状況を、幼稚園と保育所の3歳以上のクラスと比較すると、「すごろく」「福笑い」「はごいた」（3歳以上の保育所保育率20.0%）の3種が幼稚園にやや多く、「水でっぽう」が保育園に多い。「水でっぽう」は季節的には夏のものであるが、夏休みのない保育園では暑い日の水遊びとしてより多く遊ばれ、そのまま保育室に常備されていると考えられる。

年齢別では、幼稚園の3歳児と5歳児の比較において、3歳<5歳で「けん玉」0%：24.4%、「コマ」29.4%：48.7%、「あやとり」17.6%：44.9%、「すごろく」29.4%：43.6%、「はごいた」23.5%：32.0%、「福笑い」29.4%：35.9%などの差が目につくが、いずれも心身の

発達段階からみて当然の差と考えられる。保育所の3歳児と5歳児では、3歳<5歳で「お手玉」26.9%：58.2%、「おはじき」11.5%：30.9%、「あやとり」26.9%：43.6%、「けん玉」11.5%：21.8%などの差が顕著である。なお、0歳からの保育所は、3歳以上と未満を比較すると、3歳未満<3歳以上で、「あやとり」12.1%：36.4%、「福笑い」13.2%：34.6%、「すごろく」6.6%：26.9%、「コマ」27.5%：42.1%、「おはじき」7.7%：21.4%、「竹馬」8.8%：22.1%、「たこ」13.2%：24.3%、「けん玉」8.8%：17.1%の開きがあり、3歳未満>3歳以上では「まり」40.8%：27.1%、「車もの」11.0%：2.1%、「おきあがりこぼし」7.7%：0%、「紙ふうせん」15.4%：8.5%となっている。また、この3歳未満児に含まれる0,1歳のみをみると、保育率20%以上では「ままごと」「まり」「お手玉」「つみ木」の4種しか上がらない。表3参照。伝承玩具には乳児が握って遊び、振ったり、叩いたりするものがあるが、現在は一般に入手しにくくなっているため、それに代る現代の商品玩具や手作りでも、より乳児に適したものが用意されているのであろうと推察される。

② 伝承玩具活用の実態

よく遊ばれる玩具は表4にみられるように、乳幼児期の子どもの心身の機能の発達と関係が深い。3歳未満児は玩具の種類も少ないが、扱い方が単純なものでよく遊ばれ、年齢が高くなるにつれて技巧を要する玩具がふえてくる。「コマ」についてみると、保育所では、2歳10.7%、3歳11.5%、4歳30.3%、5歳40.0%、幼稚園では3歳5.9%、4歳29.6%、5歳41.0%と上昇し、「あやとり」では、保育所2歳0%、3歳7.7%、4歳9.1%

表4 よく遊ぶ伝承玩具（保育率20.0%を割るものは省略）

全施設			幼稚園			保育所3歳以上			保育所3歳未満			（保育所0,1歳）		
順位	種別	%	順位	種別	%	順位	種別	%	順位	種別	%	順位	種別	%
1	ままごと	81.5	1	ままごと	86.5	1	ままごと	74.3	1	ままごと	61.5	1	ままごと	66.7
2	つみ木	67.1	2	つみ木	75.3	2	つみ木	57.9	2	つみ木	53.8	2	つみ木	58.3
3	カルタ	40.4	3	カルタ	47.1	3	カルタ	50.7	3	まり	53.8	3	まり	50.0
4	水でっぽう	30.9	4	水でっぽう	32.9	4	水でっぽう	32.1	4	水でっぽう	40.7			
5	コマ	26.7	5	すごろく	32.4	5	コマ	31.4						
6	まり	21.9	5	コマ	32.4	6	たこ	26.4						
7	すごろく	20.9	7	あやとり	22.9	7	あやとり	22.9						
						8	まり	22.1						

5歳32.7%、幼稚園では、3歳0%、4歳19.7%、5歳29.5%と年齢に従って上昇している。「コマ」にはいろいろな形、種類があって遊び方もさまざまであるが、指先を使って廻すにしても、運動神経の器用さを必要とするものである。「あやとり」も指先の動きが自由に出来て、二人で遊ぶなら相手との協調性も育てなければ遊べない。また、「カルタ」は、保育所では2歳21.4%、3歳30.8%、4歳48.5%、5歳54.5%、幼稚園では3歳23.5%、4歳36.6%、5歳60.2%、「すごろく」は幼稚園では3歳5.9%、4歳28.2%、5歳41.0%となっており、知的興味や友だちとゲームを楽しむ気持ちの発達との関連がみられる。

### ③ 保育者の選択と子どもの選択

表3の保育施設にある伝承玩具には、全施設、幼稚園、保育所の3歳以上に「お手玉」が、また全施設、幼、保のすべての年齢クラスに「お手玉」が上位のランクで位置づけられ保有されている。しかし、両者とも表4の子どもがよく遊ぶ伝承玩具としては上位にみられない。表からは落ちているが、「福笑い」は12.7%の10位（全施設）「お手玉」は3.0%の19位（全施設）である。これらを取り入れた理由についての回答によると、「お手玉」は、乳児や年少幼児なら掴んだり、落としたり、投げたりして、年長児なら両手で操って遊べる玩具として、また自然物のじゅず玉を採り集めて俵形の袋に入れて保育者と一緒に手作りにし、掴んだ感触を楽しむなど、手先の器用さや感覚を養ったりする玩具として、さらに地域のお年寄りからのプレゼントで、老人の方々との交流をはかるのに適したものとして、昔からの伝承遊びとして子ども達に伝えたいとの意図も記されている。「福笑い」は、お正月という季節の行事とのかかわりで、伝承の遊びを伝え、友だちや保育者と楽しんで遊ぶために、とい

うような意図がその取り入れの理由になっているが、「お手玉」とともに子ども達の自由な遊びの中では活用されていない。しかし一方で、「コマ」や「すごろく」など、行事や遊びの伝承を伝えたいと意図して取り入れ、子どもも喜んでよく遊んでいる玩具もある。そこには、時代を越えた玩具の本質的な機能が備えられていて、子どもの遊びの活動の基本的な欲求が満たされる働きがあると考えられる。このような子どもの心身の活動を動機づけて発展開発させる基本的な機能を有する玩具も、今日ではコンピューター・ゲームなどに押されがちであり、その意味で親や保育者の意図的な選択は重要であると考えられる。子どもにすぐれた児童文化財を手渡す役割と責任を自覚し、実行への努力をすることは、親や保育者の大切な義務である。

### (2) 玩具と遊びの地域性

本調査におけるアンケートによる収集資料の数はあまり多くはないが、その対象は全国にわたっているので、地域性の特色がみられることを期待したが、情報化時代を反映しての画一化が浸透しているのか、玩具や遊びにおける地域性は思ったほどみられなかった。

#### ① 郷土玩具の保育への活用

地域的特色のある郷土玩具の有無については、表5に示したように幼稚園、保育所ともいずれの年齢クラスでも保有率は低く、あまり関心がないように思われる。しかし、とり入れている保育施設での活用には、盛岡市の「さんさ太鼓」愛媛県の「からしし」唐津市の「さい配」沖縄県の「パーランクー」など、郷土色豊かな伝統行事を地域社会と共に楽しむという活動がみられた。また、札幌市の「ソリ」「ミニスキー」福島県の「こけし」「だるま」神奈川県の大山の「こま」滋賀県の「おぼけかぼちゃ」熊本県の「きじ馬」「もぐらたたき」など、

表5 郷土玩具の保有率

施設	保 有 所								幼 稚 園			
	0歳	1歳	2歳	3歳未満	3歳	4歳	5歳	たてわり	3歳	4歳	5歳	たてわり
保有率%	0.0	0.0	4.0	6.4	7.5	15.6	5.8	4.2	17.6	4.3	5.3	0.0

日常的によく遊ばれている玩具もみられた。表6は、保育室に有る郷土玩具と、その特徴および子どもの遊び方を列挙したものである。今日、とかく画一的になりがちな生活文化の中にあって、このようなユニークな試みが行われていることの意義は、明日の社会の担い手となる子ども達の創造性を養う意味から高く評価されるべきであろう。文化の創造は伝承の基盤の上に築かれるということを考えるとき、地域色豊かな伝承文化の体験は貴重である。

(3) 保育者の手作り玩具とその意図

① 手作り玩具の有無

乳幼児相手の保育者は、かわいいもの、美しいもの、楽しいものにはいつでも心をひかれる傾向がある。そして日常保育室のそここちにちょっとした手作りの装飾や実用品が工夫され、潤いをもたらしていることは珍しくない。商品として作られたものをわざわざ求めなくても、有り合わせの材料で便利な身の回りの小物を作ってしまう工夫力と勤勉さを身につけていることが多いのである。そこで、保育者手作りの玩具の有無について、我々は、過半数が有りとする予想を持っていた。結果は表7の通りで、やはり幼稚園、保育所とも全年齢で最低50%の数値で手作り有りとなっている。

② 手作り玩具の種類

保育園で69.3%、幼稚園で58.8%の保育者が手作り玩具があると回答しているが、その具体的な例を図示し、子どもの反応まで求めた質問では、多くの回答者が2例～5例の具体例をあげ、わかり易く丁寧な絵や作り方が説明されている(図1. 2. 3)。種類としては、いじって遊ぶ感覚運動の機能を働かせることを楽しむもの、ままごとの材料や、いろいろなごっこ道具にみたり、椅子やテーブルとして用いて想像遊びを楽しむもの、絵や模様や形、色を合わせて構成遊びができるもの、ゲームを楽しむものなど各種あるが、3歳未満児用には手先指先きを動かして遊ぶ「紐通し」や、「ボタンはめ」、

ころがしたり投げたりする「布ボール」、振って音を楽しむ「マラカス」などが多いのが目立っている。また、伝承的要素の強い「お手玉」「竹馬」どんぐりの「コマ」「ガラガラ」「ブンブンごま」なども作られている。「手ぶくろ人形」や「ペープサート」など子どもの劇あそびに使われるものもある。全体としては、子どもの興味、発達段階を知っている保育者ならではの感じで、子ども達にもよく活用され好んで遊ばれている。保育者は伝承玩具や現代の創作玩具にヒントを得て、それぞれに創意工夫し子どもが喜んで用いるものを作って共に楽しんでいることがうかがわれる。

③ 手作り玩具の材料と製法

保育者の手作りの玩具の主材料で多いものは、布、不織布、プラスチック容器、紙、空箱、ダンボール箱、トイレットペーパーやラップの芯、牛乳パック、ビニールひも、空缶など身近にある不用品である。また、軍手や色画用紙、ビニール布や袋、紙コップ、アルミ箔、などを使って、「人形」や「お面」「電車」などを作ったものも多かった。保育者が女性のためか、縫って作る裁縫ものが少なくない。また、経験年数が長く、伝承玩具で遊んだ子ども時代を経た保育者も多いので、木しゃもじの「でんでん太鼓」や「ブンブンごま」「缶馬」なども廃品利用で作られている。総じて廃物利用のものが目立っている。輪ゴムや磁石、竹ひご、針金など荒物も利用されている。これらは、おそらく見た目の体裁は既製品の商品玩具に劣ると思われるが、子どもの日常を知り、要求を知っている保母の手作りは、体裁を上廻る利点をもって子ども達に迎えられていると思われる。

3. 結 語

子どもはいろいろな児童文化財に接することで、遊びや表現活動が動機づけられ、展開していく。子どもの文化は子どもが主体の文化であるが、それを動機づけるきっかけを作るのは主として大人である。子どもの成長にど

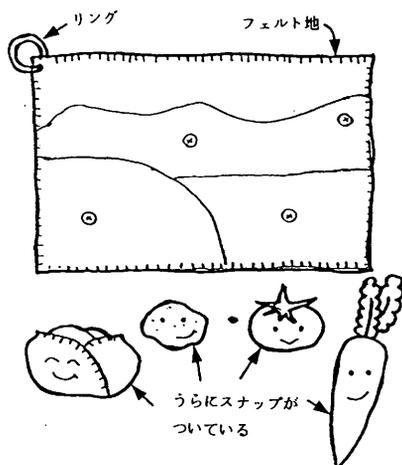


幼児玩具における教育観について

表7 手作り玩具の有無

保育所	有	年令	未満児	3才児	4才児	5才児	たてわり 3才以上	計	幼稚園	有	年令	3才児	4才児	5才児	たてわり 3才以上	計
		実数	78	20	18	13	13	13			160	実数	9	43	46	2
	%	85.7	76.9	54.5	50.0	50.0	69.3	%	52.9	60.6	59.0	50.0	58.8			
無	実数	13	6	15	13	13	71	実数	8	28	32	2	70			
	%	14.3	23.1	45.5	50	50.0	30.7	%	47.1	39.4	41.0	50.0	41.2			
	計	91	26	55	26	26	231	計	17	71	4	4	170			
	%	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0		%	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0			

のような期待をするかは、親や保育者や社会の児童観・教育観の問題であるが、遊びを通して育っていく乳幼児期の教育に、広い意味での遊具や玩具は重要な役割をもっている。本来子ども社会の中で継承し受け渡していく子ども文化の主体は子ども達自身であるが、親や保育者はそれを援助する責任をもっている。子どもの成長発達に望ましい刺激を取捨選択し、子どもの内的な成長の芽生えを豊かに伸ばしていかなければならない。本稿は保育施設における乳幼児のための玩具の現状を知り、その伝承と創造について検討し、そこにみられる保育者の保育観を明らかにしようとしたものである。研究はまだ緒にたったばかりであるが、保育施設の保育者から資料を寄せられたものを概観した。



「はたけのポルカ」の歌に合わせてスナップでとめて遊ぶ

図1 スナップ遊び

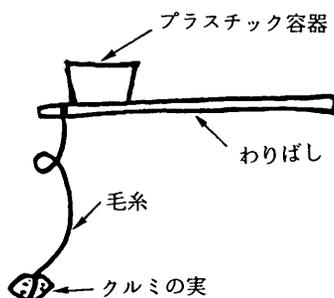
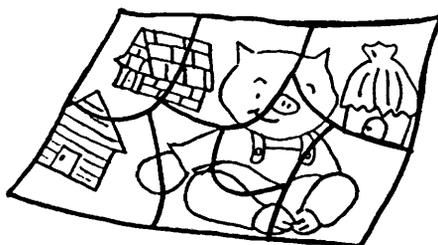


図2 けん玉



ボール紙に絵を描き切って絵や形を合わせて遊ぶ

図3 あわせ絵